

論文審査の結果の要旨

氏名 勢力尚雅 (せいりき のぶまさ)

本論文において、勢力君は、18世紀スコットランド倫理学を代表するデイヴィッド・ヒュームの思想の全体像を浮かび上がらせるために、彼の「人間的自然 (Human Nature)」という概念を考察対象とする。この Human Nature という概念は、ヒュームの主著のタイトルにもなっているものであるが、同君は、まず、これを「人間的本性」と訳さずに「人間的自然」と訳すことによって、認識問題に関しても、実践的問題に関しても、感性的なものや想像力や情念といった人間に自然に備わる能力に人間理解の主要な手がかりを求め、理性という人為的な能力を人間にとっての第一義的なものとはしないというヒュームの根本思想を明示しようとするのである。その上で、この「人間的自然」の概念の含む意味内容に、勢力君は多面的な角度から考察を加えていく。

まず、ヒュームの「人間的自然」には、デカルトに代表される、またその論敵とみなされるロックにも認められる、精神が能動的に観念を直視するという考え方に對抗する意味内容が与えられているとされる。そのように人間の心を実体化された容器のようなものとして捉え、それとそこに浮かぶ諸観念との関係を問うというのではなく、人間の心、継起する知覚とそれを統合する想像力や記憶の作用そのものと捉える所に、ヒュームの独自性が示されているというのである。そこから、自我の同一性、事物の同一性、因果性等が自明の真理であるわけではなく、感性的な「単純印象」という前提に基づいて、想像力が自らの連合法則によって「捏造」した産物にすぎないという有名な命題も登場するに至るのである。しかし、勢力君は、このヒュームの懐疑論は、決してただ知性の無力を暴き立てて良しとする類の懐疑論のための懐疑論であるわけではないのであって、完全な真理に到達しようとするとかえって自己破壊的なものに陥ってしまうという人間的知性の固有の性格と、その知性が到達する真理の蓋然性を指摘することによって、むしろ逆に、真の意味で批判に耐え得る探求を可能にする方式が何であるかを示そうとするものであったという重要な指摘をする。そこに、人間的自然に即した科学の可能性が展望されるのである。

実践に関しては、理性に対して情念の優越性を説くヒュームの思想のなかでの共感の位置づけについての同君の克明な考察が行われている。そこでは、特に、この共感に基づいて、他者とのコミュニケーションの成立と共通の利益の認識が可能になっていく経緯が説明されていくなかで、この過程に対してはたす一般名辞の使用という人間の能力の持つ意義が、言語分析的に研究されているのが注目される。

これらのヒューム哲学の中心主題というべき概念の考察をするに当たり、勢力君は、一方において、大陸観念論やイギリス経験論についての広い知識に裏打ちされた論証を試みるとともに、他方において、現代における内外の論争を引用しつつその現代的性格を浮き彫りにしようと試みてもいる。ただ、それでも、人間的自然という概念についての理性 **reason** および推論 **reasoning** という概念の位置づけがまだ十分に確定されていないこととか、情念に対する功利性の役割についての分析が十分になされていないこととかの問題点を残してはいるが、ここで示された、同君のヒュームの思想全体に対するバランスの取れた見識、また何よりもねばり強い研究には、本審査委員会は博士 (文学) 論文として十分な評価に値すると判断した。